

若者たちを育てた航空技術者教育



写真4 技能者養成所での教育(1943年3月卒業アルバムより)

学費がいくら、3か年の課程を修了した者は、中等学校卒業と同等の資格が得られるとされ、学習意欲がある生徒が集まった。

航空技術者教育の舞台となった各務ヶ原飛行場

1939(昭和14)年に飛行第一戦隊が、1943(昭和18)年に飛行第二戦隊が満洲に移駐すると、各務ヶ原飛行場は教育飛行隊や岐阜陸軍航空整備学校に使用されました。また、戦争の拡大とともに、航空技術者の大量養成が急務となり、陸軍各

各務原陸軍航空廠技能者養成所

1941(昭和16)年、陸軍省令が公布され、各務原陸軍航空支廠技能

務原航空支廠では技能者養成所が、川崎航空機工業では青年学校が開設されました。こうして各務ヶ原飛行場は、航空技術者教育の舞台となっ

私立川崎航空機岐阜青年学校

中堅技術者、工員の養成を目的として、1939年1月、私立川崎航空機岐阜青年学校が開校しました。研修期間は原則3か年で、人員も1

岐阜陸軍航空整備学校

1943年3月、航空機整備の技術者を短期間に大量養成することを目的に、各務ヶ原飛行場東に岐阜陸軍航空整備学校が新設されました。続いて同年4月に、飛行場西に分校として西校(第二教育隊)が増設され、本校は東校(第一教育隊)と位置付けられました。教育期間は、基礎教育6か月と専門教育1か年で、生徒は日夜学科や実習に励みました(写真5)。

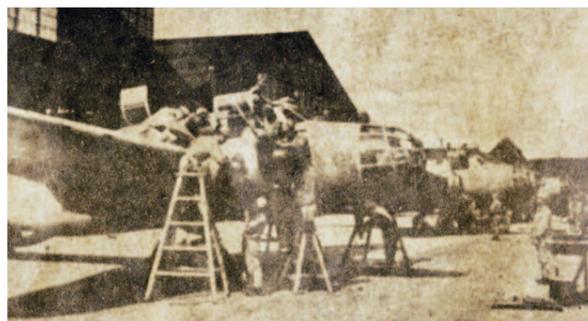


写真5 航空整備学校での整備作業実習(『岐阜陸軍航空整備学校案内』より) 岐阜陸軍航空整備学校の課程を修了すると、中等学校の卒業と同等の資格が得られるとされた。

各務ヶ原飛行場を巣立った技術者たち

各務ヶ原飛行場を巣立った若い技術者たちは、ある者は戦地に、ある者は国内外の工場や飛行場に赴きました。その中には、戦場に散っていった者もいます。しかし、彼らの中には戦争で生き残った者は、培った技術を生かして、日本の戦後復興を支えていくことになるのです。

各務野から航空機の町へ

各務ヶ原飛行場の開設

「ただ青草のみ生ず」と江戸時代の学者・貝原益軒が記した各務野は、作物の生育に適さず、原野のまま林場として利用される程度でした。この各務野に飛行場としての可能性を見出したのは、当時の陸軍です。平地で排水が良く、周囲に何も無い広々とした各務野は、飛行場には格好の地であると評価されたのです。1917(大正6)年6月11日、所沢の飛行場から3機のモリス・ファルマン機が飛来します(写真1)。16日に開場式が行われ、所沢に次ぐ日本で2番目の飛行場、「各務ヶ原飛行場」が誕生しました。

陸軍航空の拠点

1918(大正7)年10月、所沢から航空第二大隊が鶴沼に移り、1920(大正9)年5月には、航空第一大隊も那加に移ってきました。同年9月には、蘇原に陸軍航空本部補給部各務原支部(後の各務原陸軍航空廠)が設立されました。こうして、各務ヶ原飛行場は陸軍航空の重要な拠点となっていきました。

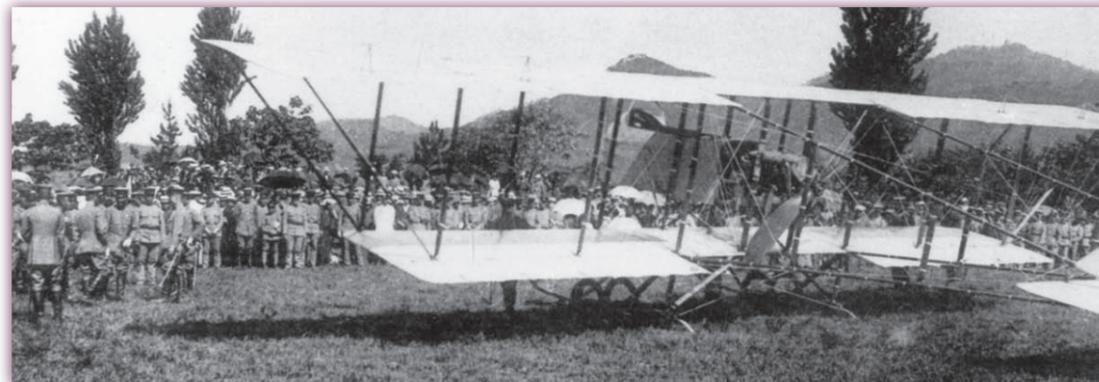


写真1 モリス・ファルマン機 各務ヶ原飛行場に到着(1917年6月11日)

航空機産業の町へ

1922(大正11)年、川崎造船所は蘇原村字野村に飛行機部各務原分工場を開設しました。この場所が飛行場の隣で、試験飛行を行うのに都



写真2 川崎航空機岐阜工場での飛燕の組立(1944年頃)

空都各務原

戦争が激しくなると、川崎航空機工業の従業員数は、最大で4万5236人になります。三式戦闘機キ61「飛燕」は、最盛期には月250機が生産されました(写真2)。人口は急増し、那加村は1940(昭和15)年に、蘇原村と鶴沼村は1943(昭和18)年に町制を施行します。商業も発達し、各務原は「空都」と呼ばれるまでに発展していき(写真3)。



写真3 那加町中山道商店街のにぎわい(1940年『空都各務原絵巻書』より)

戦時下の暮らし



写真8 那加駅から出征する兵士を見送る人々(岐阜基地所蔵資料)



写真9 前宮村の警防団・国防婦人会による防火演習(1943年)

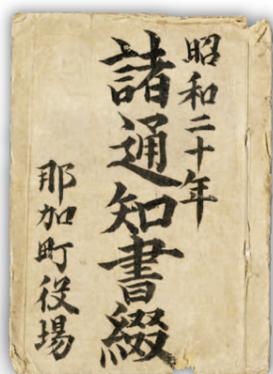


写真10 「昭和二十年 諸通知書綴」(表紙)

昭和二十年 諸通知書綴
那加町役場

終戦時、各地で戦争に関する多くの公文書が焼却処分されましたが、奇跡的に残ったこの資料からは、食糧増産に関する事、軍への協力依頼、空襲後の対応、また戦後の米軍の進駐に関する通知など、終戦前後の那加町の暮らしの一端を垣間見ることが出来ます。

人も物も戦争へ

日中戦争がはじまった1937(昭和12)年頃から、日本は戦時体制に移行していきます。物価が高騰し、戦時国債の強制購入などで家計が圧迫されました。さらに召集令状が届いた男性は、軍に入隊しなければなりません(写真8)。

「銃後」と呼ばれる、戦場へ直接行かない人々も、警防団、国防婦人

会などを組織して戦争へ協力しました(写真9)。金属や食料品などを供出し、また国民徴用令や学徒勤労令などにより、軍需物資や食糧を生産する勤労奉仕に従事しました。

空襲に備えて

1944(昭和19)年、太平洋戦争において日本が劣勢となり、本土空襲の危険が高まると、岐阜県は、消火器具・防火水槽・防空壕の準備を

呼びかけ、空襲警報時の消火活動について指導する文書を出しました。しかし、この頃はまだ「当時警戒警報が出されても、窓から空を眺めているだけで避難する人は誰もいませんでした」という体験談のように、空襲に対する切迫感は無かったようです。

同年9月、岐阜県は川崎航空機や航空廠の周辺に住む人々に対して、空襲にさらされる危険性があるため

所定の期間内に他所へ移転するよう通達しました。また、翌年4月から5月にかけて鶴沼大伊木地区では、鉄筋の代わりに竹筋を使ったコンクリート製の防火水槽が製造され、各家の敷地に設置されました。

■那加町の昭和20年

「昭和二十年 諸通知書綴 那加町役場」(写真10)は、1945(昭和20)年中に那加町役場が主に町内会長宛てに出した文書の綴りです。

各務原空襲の実態

任務番号	218	219	228	231
月日	6月22日		6月26日	
目標	1833(三菱重工)	240(川崎航空機)	1833(三菱重工)	240(川崎航空機)
部隊	第313爆撃団	第313爆撃団	第58爆撃団	第314爆撃団
出撃機数	28機	21機	79機	35機
投下爆弾	AN-M56(2 t)L. C.	AN-M56(2 t)L. C. AN-M66(1 t)G. P.	AN-M64(250 kg)G. P.	AN-M64(250 kg)G. P.
目標投下重量	90 t	116 t	411.5 t	143 t
目標投下機	—	28 t	13.3 t	24 t
投下時刻	9:16~9:18	9:19~9:23	9:12~9:55	9:26~10:00
攻撃高度	4,800~5,600m	4,900~5,500m	4,500~5,100m	4,500~5,300m
損失機数	0	1	1	1

表1 6月の空襲内容(米軍資料より)

■本土空襲

1944(昭和19)年7月、マリアナ諸島が米軍の手に渡ると、そこに建造した飛行場から大型爆撃機B-29が、日本本土を空襲するようになりました。また、本土に近い硫黄島にも小型戦闘機P-51が配置され、本土空襲に加わりました。

■各務原空襲

各務原では、13回の空襲がありました。中でも規模が大きかったのは、1945(昭和20)年6月22日と26日の空襲です。両日ともB-29が

2回ずつ、合計163機(一部は三重県を空襲)が飛来し、落とされた爆弾の総重量は826 tに及びます(表1)。攻撃目標は川崎航空機、三菱重工、航空廠、飛行場、技能者養成所等でした。

■攻撃目標となった建物

各務原が空襲で狙われた理由は、飛行場を中心とした航空機産業、航空技術者教育が盛んな町だったからです。6月22日の空襲では2 t爆弾で工場群が大まかに破壊され、4日後の空襲では残った建物が250 kg爆弾で徹底的に破壊されました。両日で、航空機関連施設の75%以上が失われました(写真6)。

■爆弾による空襲

岐阜空襲や大垣空襲は焼夷弾で町を焼き尽くす無差別爆撃でしたが、各務原空襲は爆弾で航空機関連施設を狙う精密爆撃が主でした。各務原では227人の尊い命が失われましたが、国の空襲対処措置が「職場死守」から「遠隔回避」へ変更されたことで、速やかな避難により被害が最小限にとどまったと考えられます。

■掩体壕の建設とその性格

掩体壕とは、航空機の機体を空襲の爆風から守るためのシェルターで、大きく2種類に分けられます。動員された老人や航空整備学校の生徒が、土を土手状に盛り上げて造る無蓋掩体壕、専門工人が発破やセメントを用いて半地下式や洞窟式の囲いを造る有蓋掩体壕があります。共通点は、誘導路で飛行場に結ばれていることです。

無蓋掩体壕は、本土空襲に備えて造られました。有蓋掩体壕は、本土決戦(上陸戦)に備えて特攻機を隠すために陸海軍の「決号作戦」に基づいて造られました。しかし、完成前に



写真6 爆弾の直撃を受けた川崎航空機本館ビル



写真7 矢熊山南掩体壕(洞窟式)

終戦を迎え、使用されることはありませんでした。現在も、前渡地域には、長根山掩体壕(半地下式)・矢熊山北掩体壕(半地下式)・矢熊山南掩体壕(洞窟式・写真7)が残っています。



農家から発見される戦前の航空機部品

戦後に払い下げになった東飛行場付近の農家から、新たに航空機部品が見つかりました。この部品は、機体の先端にエンジンを固定するための鉄製フレームです。断定はできませんが、一式戦闘機「隼」のものかと推定されます。

丸い形をしているのは、エンジンの気筒が放射状（360度）に配置される、いわゆる星型エンジン用だからです。戦後、航空機部品の多くが金属資源として回収される中、このように残ったことは非常に貴重です。



爆弾の仕組み (250 kg爆弾の例)

爆撃機から投下される無誘導（自由落下）爆弾は、弾体、信管、羽根、安定翼からなります。弾体は主に鉄で作られ、内部には炸薬が充填されています。信管は感知部を弾頭に、起爆部を弾底に分けて配置し、電線で繋いであります（弾頭点火弾底起爆信管）。

爆弾は頭を下にして落ちるため、弾頭で衝撃を感知した瞬間に起爆する（瞬発）、遅れて起爆する（遅発）などの設定ができます。羽根は落下中に回転して安全装置を解除し、安定翼は爆弾の姿勢を整えます。



特攻隊員が書き残した辞世の句

第40教育飛行隊（特攻隊）に所属したと思われる3人は、各務村内に寄宿して各務ヶ原飛行場へ通いました。その道中、村の婦人と顔なじみになり交流が始まりました。

終戦の10日くらい前、彼らに移動命令が下ると別れの挨拶のため、この家を訪れ「もう生きて逢える事はないので、記念の一言を残しておきます。今僕たちの思いを書いていきます。」と、娘の洋裁の帳面に書き残していきました。幸い、彼らの出撃前に終戦となりました。



天地も裂くるような砲聲

明治時代の中頃まで、各務野はとても静寂で小鳥や虫、獣の鳴き声くらいしか聞こえませんでした。ところが1889（明治22）年、二十軒から三井山麓までの3,751㎡の土地が陸軍の大砲射的場になり、「天地も裂くるような砲聲がひびく…道行く人は砲聲の音に驚きて首を縮め足を早めて通り過ぐる…」と、変化した様子を『各務原今昔史』が記しています。

この砲聲は、1997（平成9）年に市内で採集されたもので、各務ヶ原大砲射的場時代に使用されたものと考えられています。



火鉢に転用された木製プロペラ

木製プロペラの両端を切り落とし、中央の軸穴を広げ銅板成形のカップをはめ込んだものです。

側面の刻書「甲式四型戦闘機」とは、フランス製のNiD 29を中島飛行機がライセンス生産した機体名です。「イ式300HP」とは、三菱内燃機が国産化したイスパノ・スイザ三百馬力発動機です。「288 昭和4年12月23日」は、製造ロットと製造日、一番下には木製プロペラを生産していた日本楽器製造（ヤマハ）のロゴが刻まれています。



上司への感謝 渡満記念の机

1932（昭和7）年、二十軒駅の南側に陸軍航空本部補給部各務原支部の見習工養成所（技能者養成所）ができました。東北地方から7人の青年が入所した当時、宿舎は未完成でした。そこで、地元の石黒航空廠主計曹長宅へ下宿することになりました。

1939（昭和14）年10月29日、彼らは赴任先の満州へ出発します。その直前に、お世話になった下宿先へ深い感謝の気持ちを込め、自分たちの氏名を記した机を贈りました。彼らが、その後になんとなったかは不明です。

戦後の苦難と復興への道



写真11 キャンプGIFU正門前(昭和20年代)

■終戦とアメリカ軍の進駐

1945（昭和20）年8月15日、長かった戦争が終わり日本は、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領下に置かれました。各務ヶ原飛行場にも、アメリカ軍の部隊、4000人以上が進駐してきました。「キャンプGIFU」のはじまりです。

キャンプGIFU正門付近（現在の那加大東町・写真11）には、外国人相手のバーやクラブなどが出現し

ました。町の風景は一変、人々はアメリカ軍による町の発展に期待しましたが、1953（昭和28）年9月には、アメリカ軍兵士とのトラブルをきっかけに警官が発砲、兵士が負傷するという事件が起こりました。町の治安は乱れ、人々の不安も高まっていきました。

■航空機産業の停止と復活

GHQは、戦後の日本の再軍備を防ぐため旧日本陸海空軍の解体、各種軍需産業の停止を命じ、各務原の航空機産業も存続の危機を迎えていました。ところが、1950（昭和25）年に始まる朝鮮戦争にはアメリカ軍も参戦し、翌年、日本が国としての独立が認められると、1952（昭和27）年には、日本国内での航空機産業の再開が認められました。まずはアメリカ軍機の整備や修理が開始され、各務原の航空機産業は第二の誕生を迎えます（写真12）。

■自衛隊岐阜基地と各務原市民

キャンプGIFUとなっていた旧各務ヶ原飛行場は、1954（昭和29）年に発足した自衛隊の補給基地



写真12 アメリカ軍機のオーバーホール(昭和20年代)

に指定されました。1958（昭和33）年には、飛行場が日本に返還され、自衛隊岐阜基地が発足します。

しかし、基地周辺に響く航空機の騒音は激しく、また、1970年代に基地へ地对空ミサイルの配備が発表されると、平和を願う市民による激しい反対運動も展開されました。

一方、1962（昭和37）年に始まる岐阜基地航空祭は、10万人以上が訪れる市内最大のイベントです（写真13）。航空機を間近で見られ、ブルーインパルスチームの高度な飛行技術が披露されるなど、航空機の町を実感できる催しが毎年開催されています。

■歴史を伝えていくために

朝鮮戦争と自衛隊の発足をきっかけに航空機産業が復活し、各務原市は、我が国有数の航空機産業の町へ発展しました。しかし、戦争にともなう飛行場・航空機は、各務原市の歴史に、絶えず明るい光と暗い影を投げかけてきたといえます。

各務原市では、1990（平成2）年、最も激しい空襲のあった6月22日を、平和の尊さを未来へ伝える「平和の日」と決めました。戦後80年を迎え、戦争や空襲を体験した人はほとんどいなくなった今こそ、私たち市民一人一人が、戦争と飛行場・航空機が歩んだ歴史を学び、未来に伝えていく時ではないでしょうか。



写真13 岐阜基地航空祭(2018年)

資料から見る各務原市と太平洋戦争

No.10



軍用資材で子供たちに夢を

このランドセルは、戦後間もないころの子どもたちが使ったものです。素材は、皮ではなくビニールや布です。終戦後の混乱期、物資不足の時代に、残っていた兵器用の資材を利用して作られました。

製造したのは、各務原市に本社を置く高安株式会社の前身、高安合資会社。全国に工場を持ち、戦前・戦中は火薬袋やパラシュートなどを生産しました。戦後は会社存続のため、残った資材を利用してランドセルのほか、布製のミットやグローブを作りました。

No.11



戦後の悲劇(納得できない結末)

1945(昭和20)年3月9日、茨城県内で米軍のB-29が墜落し、生存した搭乗員3人は捕虜になりました。重症の1人は東京へ運ばれますが、殺されます。この時、身柄を預かった憲兵隊の中に、本川さんがいました。

終戦後、妻の実家のある関ヶ原町へ復員した本川さんは、家族との日常を取り戻しました。ところが1か月後、GHQに連行されます。その後は、横浜裁判にかけられ、3年後に彼だけが戦犯として絞首刑になりました。ご本人は、最後まで諦めずに無実を訴えました。

※資料は各務原市在住のご遺族から借用

No.7



最新鋭の航空機部品が「くず入れ」に

三式戦闘機キ61「飛燕」のスピナー(プロペラ中央部のカバー)を、鷺沼第一小学校の「記念館くず入れ」に転用したものです。スピナーを逆にし、台座の代わりに車輪のホイールがボルトで固定してあります。

当時の航空機部品はほとんど消滅しており、用途転用されて残ったスピナーの資料的価値は非常に高いものです。一方で敗戦という出来事が、最新鋭の航空機部品を「くず入れ」の価値に変えてしまったことを、この資料が物語ります。

No.8



敵国の軍隊が我が町へ

戦後、進駐軍を相手にした土産物店の看板です。「営業時間 平日 15時～21時 土日 13時～21時」と記されています。

1945(昭和20)年に戦争が終わったとはいえ、日本は敗戦国でした。敵国であったアメリカの兵隊が、今度は占領軍として自分たちの町へやってくるという大きな不安を、各務原の住民は抱きました。

治安が乱れることも確かにありましたが、一方で子どもたちとの交流、雇用や消費拡大という経済効果をもたらしました。

No.9



生き残りをかけた川崎

日本が敗戦すると、飛行機の生産は全面的に禁じられました。川崎航空機は、会社存続のため川崎産業と改称し、日用品の製造販売を始めます。

この金属製の鍋は、川崎産業の社員が前渡の民家を訪問し販売したものです。素材は、戦前に航空機部材に使用されたアルミニウム鑄物の端材を組み合わせたものであることが、分析の結果から推察されています。本体は金属板を叩き出して成形し、取っ手は航空機と同様にリベット打ちで固定されています。

令和7年度
各務原市歴史民俗資料館特別企画展
戦後80年各務原市と太平洋戦争
〜風化させない戦争の歴史〜
開催日 令和7年8月9日(土)～
8月17日(日)
会場 産業文化センター1階
あすかホール
主催 各務原市教育委員会